

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：82619

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26242022

研究課題名(和文) 博物館における文化財の情報資源化に関する研究

研究課題名(英文) Study on information resourceization of cultural property in museum

研究代表者

高橋 裕次 (Takahashi, Yuji)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・客員研究員

研究者番号：00356271

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 17,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、博物館が収集した文化財と関連する図書・文書などを整理・分類、分析し、一元的に管理する。さらに情報の共有化を図るため、これらの情報資源を新しい枠組みでとらえ直し、他の研究機関との相互利用を可能とする資料の情報資源化の方法論を研究するものである。具体的には文化財と関連付けしたさまざまな情報を参照ポイントとして逆引きすることで、必要とする文化財にたどり着くという情報資源化の方法を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research organizes, classifies and analyzes books and documents related to cultural properties collected by museums, and centrally manages them. In order to further share information, we study these information resources in a new framework and study the methodology of information resourceization of materials that enables mutual use with other research institutions. Specifically, by reversing the various information associated with the cultural property as a reference point, we clarified the method of information resourceization that it reaches necessary cultural properties.

研究分野：日本史

キーワード：情報資源化 文化財 博物館史 公文書 MLA連携 ガラス原版 史料論 料紙

1. 研究開始当初の背景

博物館は、文化財を、研究・活用・保存し、後世に伝える役割を担っている。その役割を情報資源化の観点から考えるとき、博物館に求められているのは、文化財を多角的にとらえた総合的な情報の提供であり、そのためにさまざまな人々の営みのなかで活用される文化財情報のあり方を追求することであると考える。

2. 研究の目的

本研究は、東京国立博物館が収集した文化財と関連する多様な資料(図書・文書など)を整理・分類、分析し、文化財と相互に関連付けしたデータを一元的に管理して、必要なときに引き出して活用できるようにする。さらに他の研究機関と情報の共有化を図るため、情報資源を新しい枠組みでとらえ直し、相互利用を可能とする資料の情報資源化の方法論について研究するものである。

研究代表者は、「文化財保護の歴史に関する基礎的研究」(平成21～24年度科学研究費補助金 基礎研究(B))において、東京国立博物館が所蔵する文化財保護の歴史に関わる資料の収集、整理、データ化や、国内外の主要な博物館における文化財関連資料の管理状況などの実態調査を行い、文化財保護において博物館が果たした機能や役割の変遷などを明らかにした。

その後、作成した基礎資料をもとにデータベースを構築し、総合的な研究に発展させる計画であった。けれども、収集した資料の全体像や相互の関連を把握するための作業を進めるなかで、これらの資料は、明治5年の博物館創設より蓄積された歴大な資料群として、希有な存在であり、文化財保護の歴史を研究する目的に利用するにとどまらず、資料群の構造を分析し、各研究機関の相互利用に役立つ方法論を検討することに、大きな意義があると考えらるにいたった。

東京国立博物館に蓄積された多様な情報を整理、分析し、関連する資料の作成された年代、背景、社会に与えた影響などを明らかにして、データとして取り込んで活用できるようにする必要があり、これらの情報を資源化する方法論を確立することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

文化財に関連する公文書、目録類、図書などから文化財をとりまく様々な情報を引き出す。その分析をとおして、文化財の利用のあり方を探り、その成果をもとに、文化財の相互や、周辺の学問との相関関係を明らかにすることで、人々が必要とする情報にたどり着くための方法を見つけることを目標とする。

4. 研究成果

現在、東京国立博物館の所蔵する公文書で、

「館史資料」として登録されている資料の総数は、2,046件である。その中から、文化財に関わる主な資料を掲げてみると

・列品録(明7～購入、寄贈、修理、特別観覧等)	186冊
・列品保管証	93冊
・重要雑録(明7～昭28)	43冊
・土地建物録(明8～昭11)	81冊
・動物録(明9～大正13)	21冊
・目録	287冊
・埋蔵物録(明7～昭17)	133冊
・鑑査会議録	59冊
・例規録(明7～昭21)	33冊
・博覧会関係書類	17冊
・出品録(移管、購入、借用、引継)	16冊
・諸向往復綴込帳	26冊
・正倉院御物関係書類	31冊
・日誌、日記類(明4～昭20)	24冊
・展覧会録(明38～昭19)	22冊
・庶務書類	11冊
・宝物(宝物調査)目録	97冊
・日本帝国美術略史編纂資料	53冊

これらは草創期から昭和20年代までの資料で、森鷗外が博物館総長と宮内省図書頭を兼任していた大正年間に、宮内省の図書寮が編纂、製本したのを契機に、以後、整理が継続された。従来よりマイクロフィルムで公開されているが、本研究によって、情報資源化に関連する公文書のデジタル化をほぼ終了した。公文書のうち『重要雑録』、『展覧会録』、『出品録』など、文化財の活用と関わりの深い資料より順番に、目次のデータ化を推進し、研究の利便性の向上をはかった。さらに昭和20年代以降現在までに蓄積された段ボール箱約600箱分の資料についても、基本目録を作成し、分類を行い、その全体像を把握した。

文化財がどのように利用されてきたかを目録類から検討するには、目録の形式やその変遷をもとに、記載された年代を特定し、その内容から導き出した分類法や文化財の配列などから、利用法を検討した。

【平成26年度】

・文化財に関連する目録類、図書、各種文書など、基礎資料のリストをまとめ、その全体像を明らかにした。各資料の作成時期、保管の状況を検討しつつ、資料群としてのまとまりを尊重しながら、分類法を検討した。

・展覧会図録については、文化財の具体的な活用を示す記録として、できるだけ多くの情報の抽出につとめた。また、博物館の草創期以来、文化財を対象に撮影した写真資料のデジタル化を推進した。文化財と関連資料のそれぞれのデジタル化によって、相互の関連付けを行う準備を開始した。

・公文書のうち『重要雑録』、『展覧会録』、『出品録』など、文化財の活用と関わりの深い資料より順番に、目次をデータ化した資料を分

析し、文化財の相互の関連を明らかにするための準備を行った。

調査件数	16,000 件
写真撮影件数	154 件
フィルムデジタルデータ変換	131,903 点
公文書テキストデータ化	770,000 文字

【平成 27 年度】

・文化財に関連する目録類、図書、各種文書など基礎資料をまとめた総合リストについて、各資料の作成時期、保管の状況をもとに、資料群としてのまとまりと、時代の変遷をふまえながら、分類を実施した。

・草創期の博物館は、古器旧物の保存を目的とした「壬申検査」などの文化財調査を行い、政府の殖産興業の施策に支えられて収集した文化財が、収蔵品の基礎となった。当時の目録類を分析して、文化財がどのように利用されていたかを検討した。また、東京国立博物館は、図書館を併設する総合博物館として誕生したが、所轄官庁の変更にともない、書籍館に伝来した図書は次第に失われていった。さらに、もっとも多くの文化財を管理していた天産部が縮小され、やがて美術歴史博物館と変貌する。これらの経緯を伝える目録類と文書から、その背景を探った。

調査件数	5,000 件
デジタル撮影件数	82 件
公文書テキストデータ化	800 件

【平成 28 年度】

・文化財の活用のあり方に関する研究成果をもとに、文化財の相互の関係を検討し、人々が必要とする情報にたどり着くための方法を模索した。

・博物館が宮内省の所管となって 2 年後の明治 21 年宮内省に臨時全国宝物取調局が設けられた。10 年間にわたった古社寺の宝物の実地調査では、九鬼隆一を委員長として、館の職員である岡倉覚三らによって、館の業務と密接に関連して行われた。博物館に現存する文化財の所在目録および関係文書をとおして、この調査が、文化財に対する一般の人々の意識や、博物館における文化財の管理体制に与えた影響などを考察した。

・8 月 10 日から 17 日までの日程で、アメリカのボストン美術館およびフィラデルフィア美術館において、作品の料紙を中心に、データベースの項目に関する調査を行った。

・公文書類、展覧会情報、写真資料、新聞のスクラップなどと文化財との関連付けを行い、文化財の相互の関連を分析した。

調査件数	2,000 件
デジタル撮影件数	77 件
公文書テキストデータ化	300 件

【平成 29 年度】

・これまでの研究のまとめとして、個々の文化財に関連付けた目録類、図書、文書などの

データをもとに、文化財を多角的にとらえた総合的な情報のあり方について検討した。また、情報の検索について、他の研究機関と共有する上でどのような工夫が必要かをいくつかの事例から考えた。

・8 月 11 日から 18 日までの日程で、ドイツ連邦共和国のケルン市立東洋美術館、ミュンヘンのバイエルン州立図書館において、日本の古典籍資料を中心に、作品の活用、管理や登録情報などについて調査を行った。

・報告書については、情報資源を新しい枠組みでとらえ直し、相互利用を可能とする資料の情報資源化の方法論を、実践をとおして研究する。この方針に沿って、既成のデータベースにはないような特色を持たせるために必要な考え方を検討した。

調査件数	300 件
デジタル撮影件数	50 件
公文書テキストデータ化	21 件

これらの公文書、目録類、図書などを対象とした情報資源化の研究によって、導かれる結果は、博物館におけるさまざまな資料が相互に関連していると再認識することであろう。すべてを一つのシステムで解決するのではなく、個々の文化財を情報のハブとして機能させ、博物館の図書や文書から引き出されるさまざまな情報を参照ポイントとして連結させる。これにより、文化財にはあまり縁のない人であっても、参照ポイントから逆引きすることで、必要とする文化財にたどり着く。こうした考え方は、他の研究ではみられない独創的な部分である。

そして、各研究機関との情報の共有を実現することは、将来の博物館が社会にとってどのような存在であるべきかについて、意義のある答えを導き出すための重要な手がかりとなる。博物館が後世に伝えるものは、文化財およびそれを活用してきた人間の知恵であるということも多くの人に認識してもらうことが、本研究の目指す最も大きな成果の一つである。

データベースの構築に向けて

本研究の対象としたのは、博物館の収蔵品および、館の活動に関わるすべての資料である。しかしこれらに関わるデータは膨大なものであり、その成果をすべてデータベース化するのには、2022 年に刊行を予定している「東京国立博物館百五十年史」の編纂作業と併行して行うこととなるだろう。

東京国立博物館は、創設時に書籍館より江戸幕府の旧蔵書 14 万冊を引き継ぎ、図書館を併設する総合博物館として誕生した。書籍館本のほとんどは所轄官庁および太政官文庫（内閣文庫の前身）の管理となり、次第に失われていったが、博物館の業務に必要な列品として残された医学、博物学、古絵図関連の図書には江戸幕府の旧蔵書が多く含まれ

ている。しかも図書の提出を求める所轄官庁との交渉の過程を示す文書や、図書を研究用と事務用に分けて購入した際の際の原議書、海外からの寄贈や交換に関する書類など、収集や活用の実情を明らかにする公文書が多く存在している点で、これらの図書に注目する必要がある

鷗外は、博物館総長として博物館蔵書の解題と著者の略伝を執筆したことで知られる。在職中に没したため、この解題が何を目的として行われたかはっきりしたことは不明である。しかし、蔵書解題の内容は、老練な研究者の調書にも匹敵するものであり、総長に就任後まもなく、台帳規則を見直し、図書と列品（文化財）とを同等に扱うことを定めているのは、鷗外の図書に対する考え方を如実にあらわしており、博物館の文化財に対し真摯に向き合う研究者のあるべき姿を示唆している。

報告書では、こうした東京国立博物館の蔵書のなかで、森鷗外と関わりの深い帝室博物館本を対象に、データベースの構築に向けた一つの試みを提示することとした。

現在、私たちが利用しているデータベースの多くは、検索によって絞り込まれた答えを見るものがほとんどである。関連するデータを見つけて出すためには、様々なキーワードを入力しなければならない。けれども情報に精通していなければ、本当に自分が必要とするデータに巡り会うことは困難であるといってもよいだろう。しかし私は、データベースは、操作することで、疑問点や、何らかのひらめきを得られる創造性につながるものであってほしいと考えている。

報告書では、著者の鷗外の作成になる図書の情報をできるだけ多く提示することにした。なお鷗外は略伝の順番で図書を閲覧した可能性があり、図書の配列に反映した。まず鷗外の筆跡である解題とそれに対応する略伝（人名抄）の該当部分、さらに鷗外がどのようにしてデータを抽出しかがわかるように、関連する図書の画像を示した。なお、解題の場合は左肩の欄外に分類を記入しているので、本文がたとえ数行であっても、情報を漏らさないトリミングを心掛けた。また本文に次いで、その釈文を添え、最後に東京国立博物館で作成した図書のエクセルのデータを縦書きにして枠に入れて掲げた。

収録した図書は、あらかじめ解題と略伝の関連性を重視し、情報量が多いもの約180件を選んだ。情報の多寡は鷗外自身の興味とも関連しているようで、医学、博物学の情報量が多い傾向がある。

これらのデータは、鷗外が図書を手に取り、ページをめくりながら、解題を記すとともに、序文、奥書、識語、跋文などから、著者とその周辺の人物の名を抽出した情報である。1973年に出版された『鷗外全集』第20巻（岩波書店）には、鷗外が執筆した、即非、原田

直次郎、大下藤次郎、伊藤左千夫らの年譜が収められているが、この解題と略伝の執筆は、閲覧と同時に進行されており、はっきりとした意図があったのではないと思われる。参考のため、『鷗外全集』第20巻の構成は次の通りである

年譜.....	1頁
即非年譜.....	3頁
原田直次郎年譜.....	10頁
大下藤次郎年譜.....	13頁
伊藤左千夫年譜稿.....	18頁
帝謚考.....	27頁
元号考.....	163頁
帝室博物館書目解題.....	429頁
帝室博物館蔵書人名抄.....	585頁
南都小記.....	699頁
武鑑書入.....	733頁
金銀銅備考.....	796頁
*後記.....	797頁

鷗外の書物解題、略伝の全貌については、代表者が監修に加わって2003年2月に、ゆまに書房より刊行された書誌書目シリーズ63「鷗外自筆 帝室博物館蔵書解題」全8巻・別巻1が、鷗外の自筆解題および略伝の原稿を影印で紹介し、新発見の鷗外の原稿を加えた初の完全版である。考証家としての側面を示し、周辺資料・索引も備えている。

図書の著者とその師、弟子、校訂者、出版人など周辺の人物は、これらの本が世に出て多くの人に読まれる上で大きな役割を担っている。著者と関わった人物の名は、本の成立の背景を伝える重要な情報でありながら、これまであまり注目されることは少なかったのではないだろうか。

データを入力する際、文字の配列はできるだけ原文のとおりとした。文章の区切り、段落、句読点の入れ方、文字の大きさや位置などには、鷗外の考えが反映されているからである。鷗外は難しい文字を駆使したことで知られており、『鷗外全集』も参照しながら、ときには文字鏡研究会編「今昔文字鏡」（イーアイ・ネット）を利用して、鷗外の解題、略伝の文字をほぼ原文通りに入力した。翻刻する場合には、どの文字を使用しているかを正確に示す必要がある。

私は、日本中世の典籍・古文書を中心とする史料学を専門としているが、一つの史料の中で同じ文字に関する字体について、正字と略字、あるいは俗字を混在している場合がみられる。単なるミスと判断してすべての字体を統一するのではなく、混在していることの意味を考えることも重要であろう。

但し、レイアウトの関係で、行の字数を変更している箇所もある。略伝では、図書の書名ごとのまとまりを意識して行間を空けているので、そのまとまりごとに切り出して頁内に画像を配置した。さらに、著者と校訂者、弟子などの名は行頭に揃えて記載している

ので、鷗外の意図を尊重してそのままとした。

なお、枠に入れて掲げたデータベースの項目の中で、「伝来」については、「明治十三年購入 納入不詳」などあることからわかるように、どのような事情で博物館に入ったか、つまり入手経緯の意であるとわかる。しかし「印記」の項に江戸幕府の教育機関であった和学講談所、医学館、蕃書調所、昌平坂学問所などがありながら、「医学館伝来」などとせず、伝来を不詳としているのはなぜであろうか。明治 35 年の『東京帝室博物館庶務要項』の書籍に関する事項には、「本館所蔵ノ和漢書八旧昌平覺ヨリ引継二係ルモノ其半ヲ占メ世上稀有ノ書亦すクナカラス旁以テ之レカ分類目録ヲ編纂シテ印刷ニ付スル」云々とあり、これらの図書の重要性を認めていることから、何か特別な事情がうかがえる。

公文書、目録類、図書など、博物館資料の多くは、相互に関連性をもっており、まとまった資料群としての価値はそこに見いだせると考えている。こうした情報を反映したデータベースを駆使し、魅力のあふれる博物館の活動を世界中に紹介できる日が来ることを切望している。

これらの公文書、目録類、図書などを対象とした情報資源化の研究によって、導かれる結果は、博物館におけるさまざまな資料が相互に関連していると再認識することであろう。そして、すべてを一つのシステムで解決するのではなく、個々の文化財を情報のハブとして機能させ、博物館の図書や文書から引き出されるさまざまな情報を参照ポイントとして連結させる。これにより、文化財にはあまり縁のない人であっても、参照ポイントから逆引きすることで、必要とする文化財にたどり着く。こうした考え方は、他の研究ではみられない独創的な部分である。

各研究機関との情報の共有を実現することは、将来の博物館が社会にとってどのような存在であるべきかについて、意義のある答えを導き出すための重要な手がかりとなる。博物館が後世に伝えるものは、文化財およびそれを活用してきた人間の知恵であるということも多くの人に認識してもらうことが、本研究の目指す最も大きな成果の一つである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 裕次 (TAKAHASHI, Yuji)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・客員研究員
研究者番号：00356271

(2) 研究分担者

伊藤嘉章 (ITO, Yoshiaki)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・研究員
研究者番号：80213099

浅見龍介 (ASAMI, Ryusuke)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・課長
研究者番号：30270416

丸山士郎 (MARUYAMA, Shiro)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・室長
研究者番号：20249915

恵美千鶴子 (EMI, Chizuko)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・室長
研究者番号：60566123

村田良二 (MURATA, Ryoji)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・室長
研究者番号：50415618

横山梓 (YOKOYAMA, Azusa)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・室長

物館・学芸研究部・研究員
研究者番号：00596736

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
()